

るたん散歩月

■あやちクロードル×イーガルさん (Ayachi Claudel x Ygal)

今回は音楽に携わるだけではなく、様々な作品を手掛けている方。自称「喰う空間造形屋」。自身も参加する「遊侠サーカス」の動物の被り物を製作したり、シャンデリアのデザインをしたり…難解そのものだ。しかも、大野修平氏のコーナー「ディスクガイド」に出ているではないか。これはもう会ってその場の流れでガチでお話させてもらうことにした。

カタカタとよく笑い、話は途切れず、大きな動きで歌に対する情熱、想いを熱く語る。隣にいるイーガルさんも絶妙なタイミングで話の肉付けをしてくる。イーガルさんはピアニストだけではなく、オペラ、バレエ、映画音楽を手掛ける現代音楽作曲家。

あやちクロードルさんは、もともと歌手を目指していたわけではなく、むしろ美術大学で彫刻を勉強していた。学生時にほぼ毎日出入りしていた「青い部屋」のオーナー、戸川昌子さんに「あんたも歌ってみなさいよ」と無茶ぶりされたのがきっかけ。当時のオーセンティックなシャンソニエとは違い「なんでも好きな歌いなさい」と。そのオープンな環境が様々なジャンルを歌いこなす今のあやちクロードルさんを生んだのかもしれない。イーガルさんとの出会いも青い部屋だった。

“クロードル”という名も、青い部屋ピアフルームに来ていたお客さんが酔ってあやちクロードルさんの名前を思い出せず「あれよ！彫刻の勉強してる子！クロードル！」と叫んだのがきっかけ。もちろん、フランスの彫刻家カミーユ・クロードルというのも意識はしてるが、その方の人生があまりよろしくないのでもそと一緒にされるのはあまり気が進まないようだ。

「シャンソン」を歌うようになったきっかけはなんだったのかという問いに、レコード店でなにか自分に合うジャンルはないかなと探している時に「シャンソンなら、日本語で口ずさめる歌詞があるかな」と直感的に選んだだけだという。だからジャンルに縛りはないが、最近は近代詩人作品にイーガルさんが作曲し、歌うことが多い。特に吉原幸子、寺山修司、立原道造、竹内浩三などが、国内外問わず歌うし、気に入ればなんでも歌う。 Kult・ヴァイル、童謡、端歌、小唄、歌謡曲。子供たちの前でも歌う。老若男女全方位型音楽家だ。その対極にある活動に大道シャンソンショー「Noir」がある。その最たるものが、「ヘブンアーティスト」。取得が難しいとされる東京都公認の大道芸人なのだ。大野さんのディスクガイドに書かれていたのもこの時の様子だ。

「あやちクロードル×イーガル」が徹底していることがある。それは、その曲を歌うと決めた時、その曲に関する時代背景、歴史、関連文献、資料映像などを徹底的に調べ、把握し、お互いに話し合うことで自分たちにきちん落とし込んでから歌うことだ。「戦争について歌う時、もちろん戦争の知らない世代だし、いま歌っている年配の方でさえ、戦争を知らない方がほとんど。だからこそ、その当時の歌手はどんな心境で、どんな環境で歌ったのか、少なくとも気持ちの部分だけでも把握してから歌うべきなんだよ」

訳詞をつける時もそうだ。訳詞に関しては、第三の男であり謎の詩人「杉田ヌクモラ」が主に独仏伊語の日本語訳詞を担当し、軽いシャンソンは英語堪能なイーガルさんが一旦英語にしたあと詞をつけることもあり、ヌクモラさん、イーガルさん共に、極力、原文から逸れないように言葉選びをする。日本語にするとうしても原曲に比べ言葉数が少なくなる。だから、日本語の韻と原曲の韻とのバランスを考え、原曲のもつ風景や雰囲気絶対に崩さないように日本語の詞をつけていくのだ。「そこだけは絶対に守りたいし、誰もやってないからこそ、自分たちはきちんとやるんです」と。先日大道芸の時に披露した、大野修平氏絶賛のオーシャンゼリゼもそのポリシーのもとイーガルさんが訳詞をつけた。

あやちクロードル×イーガルがいま力を入れていることのひとつに大道芸がある。

「大道芸ってお客様の評価が即出て分かり易いです。たまたま通りがかった人の時間を拘束するんです。興味を持ってくれた人はその場にとどまり聴いてくれるし、ダメならそのままスルーされるんです。さらにそのあとにお金を出してもらって。だから常に観客がどうしたら喜ぶのか演奏しながら考えてます」とイーガルさん。

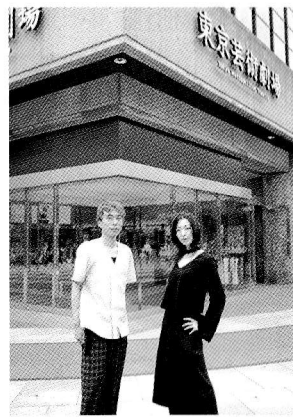
大道芸では常に同じ環境はありえない。音響もない、ルールもないところでやることは本当に勉強になるという。彼らにとっては修行だという。衣装が独特なので、通りかかる子供たちは興味津々。何が起きるだろうかと期待に満ちた眼差しが可愛いという。

「観客の中に業界関係者らしき方がいたりすると、あとで怒られんじゃないかなあと思いきや、素晴らしいよ、なんて言われるんです」本人たちもダイレクトなスリル感を味わっているのかもしれない。帽子にお金を入れてくれる方もいる。音楽を提供する一お金を頂くという商売の原点も味わえるという。やはり「シャンソンは外でも歌わなきゃだめだ」と強く思っている。

話を聞いていく中で思ったことは、もともと、歌の勉強をしていたわけでもなく、歌手になるつもりもなかった、あやちクロードルさんがいまこうして音楽活動をしているのは、やはり人生で大きな影響を受けた「青い部屋」のあの環境だった。「とにかく、いい意味で色んな方が出入りして、ジャンルの違う人たちとの出会いもあり、ものすごい刺激を受けたんです。なにかやろうとしたときに面白い人たちがいた」とイーガルさん。その時の環境が現在の「あやちクロードル×イーガル」を作った原点なのかもしれない。

彼らの曲は難しい言葉も多く、その意味は重い。「僕たちの歌って、とにかく重いんです。難しい言葉も多いから一回聞いただけだと記憶できないし、追えないかもしれせんね。何度も聴いて頂ければ聞きやすくなりますよ」とイーガルさん。ネットのレビューにも書かれていた「癖になる曲」という意味を確認したかったのがここでスッキリした。あやちクロードルさんが「スルメイカみたいな感じ」と言ったのが今も頭から離れないでいる。

イーガルさんが自分達の役目について語ってくれた。「まずシャンソンの文化の火を消さないでいきたいという強い気持ちはあります。先人たちが築き上げてきたシャンソンも好きだし、ジャンルに限らず音楽の素晴らしいものを次の世代にバトンタッチできるようにするのが我々の役目であるし、いまはその役目ができる場所にいます。昔は自分達の音楽はなかなか受け入れられないかと思ってましたが、いまはそんなことを思うこともなく自分達の作品をつくって行ってます」



シャンソンを歌いたいなあと思っている若い世代の人達にはぜひとも型を気にせず、カッコいいと思ったことを自由によって欲しいと願っているのだ。そして、道でも歌えばいいと。

これからも独特な「あやちクロードル×イーガル」ワールドで「癖」になるような音楽、パフォーマンスを繰り広げて欲しい。

「インタビュー記事を読まれた後は動画*をご覧いただき、お気に召していただけたら、ぜひとも道にも来ていただけると嬉しいです(笑)」オリジナルティ溢れる独特な世界を覗きみせていただきたい。癖になりますよ。

※ミュージック・ヴィオンがARで配信中国。